

**対人行動に影響を与える対犬課題の効果
「教える」という社会的関係を軸とした「アニマル・セラピー」という営為の分析**

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
横井 沙弥佳

本研究では対象者が犬と接すること、または犬と接する第三者を観察することで行動的アプローチを自発的に獲得することを目指した。具体的には、実験室場面において動物に対して、「教える」という行動を通し対犬課題中に犬に対する行動的アプローチがどのように変化するか、実験者のモデルを真似ること(モデリング)による行動的変容を目指すこと、対犬課題を通して行動的アプローチを用いることができるようになり対人課題でもその行動が般化すること、の3点について探索的に統制実験を行った。実験デザインはプレテスト、単純接触期、介入期1、介入期2、ポストテストで構成した。実験協力者は立命館大学および立命館大学院に在籍する大学生・大学院生2名であった。また、プレテスト・ポストテストにおける被援助協力者役に、同大学院に在籍する学生に協力を得た。介在動物は実験者の飼育している犬を用いた。行動の指標は1.行動的アプローチの生起率(プロンプト、スモールステップ、確立操作、即時強化)、2.言語的アプローチの生起率(言語的プロンプト、肯定、否定)、3.フードの使用頻度(プロンプト、強化子)、4.人と犬への注目回数、5.犬の課題分析達成率を測定した。プレテストでは実験協力者に、被援助協力者と一緒に課題に取り組んでもらうこととした。介入フェイズは、単純接触期、介入期1、介入期2で構成された。単純接触期では課題を与えられることなく、定常状態において実験協力者が介在動物に対して15分程度自由に過ごしてもらった。介入期1では実験者の介入なしに介在動物とともに課題に取り組んでもらった。介入期2では実験者が実験協力者に対しフィードバックとモデル提示を行うことを加えた。ポストテストの手続きはプレテストと同様であった。両実験協力者に共通してみられた結果として、行動的アプローチではスモールステップと即時強化の使用率が介入期を通して増加し、ポストテストでも維持される傾向にあった。また、言語的アプローチでは介入期を通して肯定的な発話が増加し、ポストテストでもそのまま増加した傾向で維持された。フードの使用方法がプロンプトから強化子としての使用の増加へ移行したことも両者に見られた結果であった。くわえて注目の回数が介入期に入ると増加することも共通して見られた。以上の結果から動物と接することで、即時強化やスモールステップといった行動的なテクニックを獲得できる可能性が見いだされた。またモデルを真似するということが、これまでの行動を変容させる可能性を提示した。さらに、動物との関わり合いでの学習が対人場面でも生起することが確認された。今後は操作交代を行う等デザインを工夫することで、より詳細な分析が可能となるだろう。